

聖ヨハネ・マリア・ビアンネ



フランスの「アルス村の聖司祭」として知られている聖ヨハネ・マリア・ビアンネは、1786年5月8日に南フランスのリオンに近いダルディリーという小さな村の農家に生まれました。熱心な信仰をもつ両親の影響もあって、聖ビアンネも子どもの頃から信仰が熱く、特に聖母マリアへの信心に熱心でした。

神学校に入った聖ビアンネは、幼少時代に教育らしい教育を受けることができなかったこともあり、勉学上の数々の困難を強いられることになりましたが、忍耐をもって勉学に励んで克服し、1815年8月に司祭に叙階されました。アルス村の主任司祭になったのは、それから3年後のことで、以降1859年8月4日に73歳で亡くなるまでの41年の間、この小村の司祭として尽くしました。

聖ビアンネが司祭になった頃のフランスは、革命の影響もあって、人びとの心は宗教的にも道徳的にも問題があり、聖ビアンネが着任したアルス村も同様でした。そのような状況の中で、聖ビアンネは村人たちに、祈りと悔い改めの生活を身をもって示し、ミサとゆるしの秘跡を大切にすよう、忍耐強く呼びかけました。その結果、人びとの心を神に立ち返らせ、村を立ち直らせたのでした。

やがて、聖ビアンネの名声はフランスをはじめ、国外にも広まり、多くの巡礼者がアルス村を訪れようになりました。聖ビアンネは、「罰するよりも赦すことを望まれる神」を人びとに伝えるため、一日十数時間も告解室に座り続け、訪れる巡礼者にゆるしの秘跡を授けていたといわれています。

聖ビアンネは、1905年に教皇ピオ10世によって福者に、さらに1925年5月31日に教皇ピオ11世によって聖人に列せられました。

聖ヨハネ・マリア・ビアンネと高円寺教会

聖ビアンネが列聖された3年後の1928年1月に高円寺教会は設立されました。初代主任司祭のギュスターブ・マイエ神父（パリ外国宣教会）と列聖時の東京教区長のレイ大司教は共に南フランスの出身で、聖ビアンネを尊敬していたため、高円寺教会の守護の聖人に迎えたといわれています。